

令和7年度第3回岡山市総合教育会議

日時：令和7年11月13日（木）

場所：市庁舎 第3会議室

午後3時29分 開会

○司会 定刻となりましたので、ただいまから令和7年度第3回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、市長、教育長及び3名の教育委員会委員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望があった場合は、入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長 よろしいですね。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 よろしくお願ひします。

○司会 傍聴の希望があった場合は、入室を許可いたします。

それでは、説明事項及び協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。

市長、よろしくお願ひいたします。

○市長 ありがとうございます。

それでは、次第に沿って議事を進めます。

今回は、岡山市中学校長会を代表して、森安校長に議論に入っていただきたいと思ひます。初めての出席となる森安校長、自己紹介をお願いいたします。

○森安中学校長代表 岡山市立岡北中学校の校長の森安史彦と申します。

本日、このような大きな会に招かれ、光栄で、ありがとうございます。

初めて大森市長様や教育委員さんと話ができるのは、うれしくてわくわくしているのですが、緊張しております。

本日、歴史や探求についてもキーワードになっていると伺っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○市長 ありがとうございました。

それでは、教育長から第1期・第2期岡山市教育大綱の総括について、及び第3期岡山市教育大綱の柱についての説明をお願いいたします。

○教育長 本日は、第3期教育大綱の柱及び具体的な取組について議題に取り上げていただき、ありがとうございます。

第1期・第2期教育大綱の総括も含め、資料が10枚あり、多ございますので、ポイントとなる箇所を中心にご説明させていただきます。

時間も限られておりますので、まず説明事項として、資料1から資料5まで話をさせていただきます。

そこには、第1期・第2期教育大綱の総括の確認、そしてそれを基に考えた第3期教育大綱の大きな柱などを示させていただいています。その後、市長から総括について、柱についてコメントをいただいて、協議事項に入らせていただければと思っています。よろしくをお願いします。

早速ですが、資料1をご覧ください。

第1期教育大綱策定当時の課題として、学力については中学校の偏差値が全国平均を大きく下回っていたこと、小・中ともに無回答率の割合が全国平均をかなり上回っていたことが挙げられます。問題行動等については、中学校の暴力行為の発生件数、小学校の不登校の出現率が課題でした。これらの課題に対し、学校では校長による週2回以上の授業参観や、教員への指導・助言、年間3回以上の問題行動等への対応に関する研修会や、関係機関を交えたケース会議を実施しました。教育委員会としては、学校の取組を後押しするため、学期1回以上の学校訪問及び指導・助言などを行いました。その結果、学力については学校の授業改善が進み、全国平均レベルの学力を達成し、無回答率も改善されてきました。問題行動等については、校内の支援体制づくりが進み、不登校の出現率は全国平均に比べ緩やかな増加にとどめることができました。

次に、資料2をご覧ください。

第2期教育大綱策定当時、記述式問題の正答率や英語力に課題があり、引き続き全国平均レベル以上の学力を目標としました。各学校では、校長による週2回以上の授業参観と調査結果を活用した授業改善に向けた取組を継続し、教育委員会は学期に1回以上学校訪問し、学校運営等について助言を行いました。また、年4回、学校に授業改善に関する助言を行い、若手教員への研修の充実を図ってまいりました。結果として、目標の全国平均レベル以上の学力は達成できました。また、指標である記述式問題の正答率も全国と同程度となり、自分の考えを整理して伝える子どもが増加したと考えています。

しかし、一方で情報を収集し考えをまとめて発表している子どもは増加傾向にあり、授

業改善は進んでいるものの、依然として全国よりは低いため、未達成と捉えています。したがって、自らの考えを発信する力の向上や、探求的な学習の充実を図ることが今後の課題であると考えています。

資料3をご覧ください。

第2期教育大綱では、新規不登校を抑制することで、不登校児童・生徒数の減少につながると考え、新規不登校児童・生徒数の出現率を0.47%に抑えるという目標値を設定しましたが、下のグラフのとおり、全国平均よりも緩やかな増加にとどまったものの、目標達成に至りませんでした。

効果があった取組としては、全校での個別の支援計画の作成があります。全国的には、不登校を理由に30日以上欠席の子どもを対象としておりますが、岡山市は独自に令和3年度から年間10日以上欠席した子どもを対象に作成し、その計画に基づく具体的な支援を行っていることが特に有効であったと分析しています。個別の支援計画とは、不登校になったきっかけや不登校が継続している理由を把握し、その子どもに応じた支援策を策定するものです。今後も、支援の進捗状況に応じて子どもや保護者の思いを酌みながら、定期的に支援計画の内容を見直し、組織的、計画的に学校全体で支援を継続していきたいと思っています。また、教育委員会だけでは手が届かないところの支援については、今後関係部局との議論が必要であると考えております。

資料4をご覧ください。

第1期・第2期教育大綱の総括に加え、さらに国の教育振興基本計画の2つのコンセプトや、少子化、人口減少等の社会背景、時代の潮流を踏まえ、これからの岡山っ子に必要な力を、中ほどにありますが、考える力の基礎となる学力と発信力、地域や社会とつながり貢献しようと思う心・実践する力と考えました。これら2つの力を育成していくために、第3期教育大綱の次の3本の柱を立て、重点的に取り組んでいきたいと考えております。

資料5をご覧ください。

第3期教育大綱の柱の案を掲げております。

1本目の柱は学び続ける力の育成、2本目の柱は不登校の子どもへの切れ目ない支援、3本目の柱は岡山市への愛着と誇りの醸成です。柱の詳細についてはこの後説明し、それぞれについてご意見をいただければと思います。

私からの説明は以上です。

○市長 ありがとうございました。

1期、2期の総括と、その流れで次の柱が出てきておりますけれども、まずは少し、これについて意見をいただいたらどうかと思うのですが、各校長さん方は1期、2期直接先生として、また一部教育委員会におられた場合もあるでしょうけど、携わってこられて、どうということをお感じになって、今3期の柱の案が出てきていますけれども、それらについてどうお考えなのか、まずは安東さんのほうから。

○安東小学校長会長 それでは、失礼いたします。小学校長会の安東です。よろしくお願いいたします。

これまでも、学校としても精いっぱい取り組んでまいったところです。その成果が表れているのかなと、私としてもうれしく思っているところです。ただ、例えば先ほどの、情報を収集し考えをまとめて発表している児童が全国に比べて低いとか、そういうふうに自分で調べてまとめて表現することについて、まだまだ授業改善が要るんだなということを改めて反省として感じるところで、今後ぜひ取り組んでいくべきところではあるかなと思います。

また、不登校等についても、穏やかな増加にとどまったと教育長のご説明もありましたが、不登校の児童がいるという実態自体は存在しているので、学校としても精いっぱいこれからも知恵を出してまいりたいと思いますし、いろいろな知見を生かして、たくさんの人の力で支えていくということを私としても取り組みたいなと願っているところです。

○市長 柱については、こういう3本柱でいいということですかね。

○安東小学校長会長 はい。今、まさに岡山市の実態に沿って取り組んでいる1番、2番、そして3つ目の、これも議論がありましたが、岡山市への愛着や誇りというものを大切にしていくということが、今子どもたちに必要なものであると考えていることから、その部分についても柱として大事な新規のポイントであろうかと私も感じているところです。

○市長 ありがとうございました。

森安さん、どうでしょうか。

○森安中学校長代表 学力の向上について、校長の授業参観、指導・助言週2回というのがあるのですが、やはり校長が廊下を回ると、それだけでも背筋が伸びるというか、見ているよというだけでも大きく違ってきたのではないかなと思っています。その点では、すごく効果があったと思っています。ただ、小学校はかなり校内研修が進んでいるのです

が、中学校はまだ校内研修が進んでいない。校内研修って楽しいよという雰囲気にしてあげるとか、それから特に若手教員が増えているので、若手教員の研修、その枠組みを校長、あるいは教育委員会がしっかりつくってあげるといいかなと思ってやっています。

それから、不登校児童・生徒への対応につきましては、本当に早期のアプローチが大事で、早期のアプローチでいろいろやったださっているのですが、さらにそれを充実していったいただけたらうれしいなと現場では思っております。

3本柱については、本当にこのとおりで、いいのではないかなと思っております。

○市長 その校内研修って、具体的にどんなことをやられているのですか。

○森安中学校長代表 多くは、公開授業を、例えば1人の教員、一つのクラスだけ残して全教員が見ていく。それについてどうであったか、教材はどうであったか、子どもとのつながりはどうであったかというのを検証します。また、それを公開授業の前に模擬授業をしたり、それから指導の検討をしたりするようなことをします。

○市長 それが、中学校でなかなかできていないというのは、何か原因があるのですか。

○森安中学校長代表 中学校は、やはり教科の専門性が強く、英語のことはちょっと分からないとか、理科のことは分からない、お任せなところがあるというのがずっと続いてはいたのですが、教育委員会が今「まなプロ」とかをやってきてくださっているので、幾らか全体で見ていこうというような形になっています。小学校は、全部教科を全員の先生がするので、本当に自分事としてこれは役に立つなという感じで早くからされていて、研修をよくやっていらっしやると見えています。

○市長 難しいかもしれないですけど、やはり人の授業を見て直していくというのは重要なことのような気がしますけどね。よろしくお願ひしたいと思います。

委員の皆さん方でどうでしょうか。

○上西教育委員 3期の柱につながるということで、1期、2期の結果の確認からお話しいただきましたが、学力については今までも何度もお話が出ていますが、一定の成果は出ていると評価してよろしいかと思います。ただ、この学力というところを柱から下げるわけにはいかないのだろうと思いますので、これを第3期でも維持し、さらに探求的な学びという形で、さらに発展を目指しているというのは評価していいのかなと思っています。

それで、同じく不登校の問題ですけれども、これも2期から引き続きの柱になっていますけど、これもやはり、相当数の不登校の生徒がいる以上、これを柱から下げるわけにはいかないだろうと私も考えています。

それで、3つ目の柱ですけど、これはすごくいい柱だと思っていて、子どもを孤立させてはいけない、個人としても孤立させてはいけないし、家庭も大切だけど、家庭を孤立させてもいけないと。やはり、社会の中で生きていくんだということを学校で学ばせていく必要があるのだろうと思いますので、その意味でまず地域とか、身近な岡山市の中で、どういう環境で生きているのか、生まれて育っていくのかということを学校で教えていくというのは非常に意味があることだと思っていますので、この柱には賛成しております。

○市長 社会の中で生きていくんだって、いい言葉ですね。

門原さん、お願いいたします。

○門原教育委員

1期、2期を踏まえて、今ご説明があったことで、やはり学び続けるというのはとても大事なことで、学校で習う知識だけではなくて、生き方とか、いろいろなことを学び続ける姿勢というのは持たないといけないのだと、その基礎基本として学習というものを中心に据えてやっていくということは大事なことですし、ずっと話し合いをしてきましたけれども、児童・生徒の実態から課題を立てて、情報を集めて、発表して、また課題を見つけるという、PDCAを回すというところが低いということがありましたので、探求的な学習を充実させていくということは、これから生きていく子どもたちにとっても、教員にとっても自分の学級がどうであるかとか、自分の学校がどうであるかということを考えるときに、とても大事な柱だと思っています。

不登校に関しましては、学校にまだ行けないというか、行きにくい子どもがいるということは考えていかないといけないのですけれども、関係部局間の連携というのがこれからはとても重要で、学校だけでは手が出せない、なかなかやりにくいところにおいても、いろいろなところと連携するのですが、その連携の在り方をきちっと整理しないと、情報をどこがどうやって集約して、誰が動くのかというところをこれから考えていきたいなと思っています。

それから、新規のところですけども、子どもの意見から、地域や社会をよくするために何かしてみたいという回答が多かったというのがありますので、子どもたちは地域の中で生きてきて、何か地域のためにしてみたいけれども、どうやったらいいとか、そういうことがまだつかめていないこともあるので、何か仕掛けをつくって、子どもたちの探求とも絡まって、自分が考えて動いて、それがひいてはキャリアにつながればとてもいいと思っています。したがって、この3つで進めていくのはいいと思います。

○市長 ありがとうございます。あと、不登校の関係の関係部局との連携というのが今回新たに大きく打ち出そうとしている、今日も担当が来ていますから、後でまた聞いていただければと思います。

では、片山さん。

○片山教育委員 私も、この3点について、岡山市の子どもたちにとっていい視点でありがたいなと思っています。

まず、学び続ける力に関しては、探求的な学び方というのは教科の学習を通じてというところもあると思うのですけれども、自立していくに当たって、社会で生きていく上での自己課題というのが、いろいろ迷うこと、葛藤することがある中で、教科の学習だけじゃなくて、教科の学習で身につけた探求的な、そこをクリアしていくとか挑戦していくとか、何か新しく自分で皮を脱いでいくとか、見つけていく、そういう生き方の学びにもつながる探求的な学びになるのではないかなと、親としても期待したいところです。

それから、ICTの活用に関しては、先日竜操中学校で、いわゆるICTがないとできない教育を実践してくださっていて、教科書を見ても、実際よく分からないなというところを可視化してもらって、ICTが効果的に使われている授業を拝見することができて、まずはICTの導入というところがこれまで課題だったと思うのですけれども、そこを今度はどううまく活用していくというところで、ここも期待できるところかなと思います。

それから、2点目の不登校に関してですけれども、この切れ目のない支援というところで、やはり小学校1年生、それから中学校1年生の不登校が少し増えている感じがあるかなと思います。そういう意味では、岡山型の一貫教育というところで、地域ごとに就学前から中学校まで縦でつながってもらっているのが、学校種間の連携とか、お互いの理解というところが進んでいくことも、コロナ禍で一時止まっていたと思うのですけれども、これから切れ目のないというところで、学校種間の連携がつながっていったらありがたいなと思います。

最後の岡山市への愛着と誇りということに関しては、上記の2つをしっかりと実践してもらうことが、何か自然に学校を好きとか地域で楽しいとか、不登校の子どもたちにも少しいろいろな支援が、明かりが見えてくることによって、地域で育ててもらっているとか、自分の居場所がある、岡山市が自分の居場所なんだ、地域のここが僕、私の居場所なんだということが、まず何より市への愛着につながっていくのかなというところで、上記2つとつながってくる新しい、仕掛けも含めて、歴史とか、いろいろな探求型の学習も含め

て、全体的な学びが愛着につながっていくとありがたいなと思います。

○市長 おっしゃるように、3つとも何らかの形で関係し合っていることだと思います。

皆さん方の意見をお伺いしました。それで、この3本柱で行くことに関しては、皆さん異論ないということで行かせていただきたいと思います。

それでは、それぞれの項目について各論を整理していますので、教育長から説明をお願いいたします。

○教育長 それでは、まず1つ目の柱からですが、資料6をご覧ください。

1 本目の柱、学び続ける力の育成について説明をいたします。

第2期教育大綱で目標とした、全国平均レベル以上の学力を維持しつつ、探求的な学び方の習得を目標としております。

教科等で身につけた知識や技能を活用して学習を進め、学力を確かなものにするとともに、探求的な学び方を身につけることで、生涯にわたり学び続ける力の土台づくりをしていきたいと考えています。これは、次の学習指導要領の方向性として国が示すものとも合致しております。今後、教育大綱の取組の柱として、持続可能な社会の作り手である子どもたちが、学力と探求的な学び方の両方を身につけ、その両方を合わせて学び続ける力と考える、生涯にわたり学び続ける力を持つ子どもの育成を目指していきたいと考えております。

具体的取組としては、学校では校長の授業参観や指導・助言、学力調査等の結果を活用した授業改善を今まで以上に継続していきたいと考えています。教育委員会としては、学校訪問を続け、学校運営等への助言やよりよい授業に向けた学校の改善プランや、研究体制に対して指導を行います。拡充するものとしては、特に力を入れて取り組むものとして、学校は子どもが探求する活動を取り入れた授業づくりを、教育委員会はその学びの場として、子どもたちが学習の成果を多くの人へ伝えることができる場の設定を考えたいと思っています。

資料7をご覧ください。

探求的な学習とは何かというところを示しております。

探求的な課題については、主に4つの学習活動があり、まず1つ目、子どもがなぜだろうと思ったことを課題として設定します。次に2つ目、どうやって調べようかなと考えて情報収集をします。3つ目として、調べたことを整理し分析します。最後の段階においては、広くみんなに伝えて解決を図ろうと考える。具体的な姿は、図にあるとおりでございます。



ます。こういった一連の探求的な学び方を習得していく子どもが、本市で目指す姿です。

説明は以上です。ご協議をよろしくお願いいたします。

○市長 ありがとうございます。

では、まずは同じように校長さんからお話を伺いたいと思いますけど、私は、時々でも授業参観をさせてもらって、探求的な学習というか、この言葉がいいかどうかは別にして、何かいろいろ考えさせることは相当やられているのではないかなというような気がしますけれども、まずは安東さん、どうですか。

○安東小学校長会長 調べてまとめて、それで表現していくということ自体は、珍しいことでは確かにないのだと思います。これは、現行の学習指導要領ができるときに既に言われていたことですので、この活動行為自体が珍しいかといったら、そういうものではないのだと思います。ただ、これをまずは徹底して、総合だけではなくて、各教科の一つ一つの授業においても、子ども自身がこのサイクルを回すということを本当にやっていくことが1点大事なかなと思っています。

それから2点目は、この学び続ける力の育成に関して一番大切になるのは、子どもが問いを持つということだと考えています。これから、それこそA I の時代になって、調べてまとめてなんていうことが機械的にできてしまう時代に、本当に人間として必要なものは何かを考えたときには、人間自身が問いを持ち、調べようと思うこと、そしてそれを解決する、解決していきたいと思うこと自体が人間の主体性であり、人としての価値なのだと思います。そういう意味から、問いを本当に子ども自身が持つということに今後力点を入れていくということが、この学び続けるということの恐らく本質的に取り組むべき問いになってくるのだろうと思います。そうなったときには、その問いを子どもが持てるようにするために、子どもにとって意味のある探求、例えば不思議だなとか、分からないなとか、何とかしたいなとか、美しいから私も取り入れてみたいとかというふうに、子ども自身が真にそれを追求したいと思えるような授業のつくり方、教材の与え方、そういったものを今まで以上に丁寧にやっていくことが、恐らく形は同じでも、質の違う、これから求めるべき探求になってくるのだろうと私は考えています。

○市長 ありがとうございました。

森安さん、お願いします。

○森安中学校長代表 今、安東先生が言われたように、やはり多くの授業でこれを意識することが大事なかなと思っています。今の授業で、資料7を見ると、実はおとついに先

ほど言った授業研究、公開授業をしたときのお題が、外国人に日本のものを英語で紹介しようというものでした。それで、同じように、最初に、前の時間にお薦めの食べ物とかお薦めのアニメとか、先生が事前にアンケートを行って、それからランキングもしてくれていて、その授業は表現がメインですと。それで、この授業はあくまでも1時間で全部ができるとは限らないので、表現を特に意識しているんだよとかいうことをしっかり意識して教員がやるし、みんなもそれで検討するとか、そういったようなことが大事なとも思っています。ただ、これを1時間でやっている教員はおります。新聞記事を読んで、それを5分で要約して、感想を書いて、提案まで、この記事に対してこういう提案を私はしますというようなこともやっているような教員もいて、そういった好事例をいろいろなところに発信して、探求的な授業を進めていったらいいなと思っています。

もう一つは、とんでもないことを言うかもしれないのですが、探求でも読書とかをやったらいいのではないかな、読書をすると、次から次へと知りたいような、調べたいというような気持ちに、まさに探求になると思っています。岡山市は図書館常駐の司書さんも多いと聞いているので、協力してやったらどうかと思っています。司書さんの会で挨拶のときに、東京大学の佐藤学先生の生成AI時代における読書についてという記事があったので、それを配ったらすごい喜んでいて、佐藤先生は、生成AI時代には、大切なのは教養だと。それで、教養をつくるのは読書しかない。これを教員は全員知るべきだということを書いていたのです。確かにそうだなと思っています。

○市長 ありがとうございます。

上西さん、何かあります。

○上西教育委員 今、校長先生がおっしゃったように、授業の中で探求的なことというのは確かに大切なことかなと、学校訪問とかをさせていただいて、私どもが習った頃に比べると、探求的になっていて、僕らのときはもうちょっと一方通行的な講義が多かったかなと思うので、そのあたりはかなり努力されているし、今後ともそれは続けていただけるのだらうと思います。

それで、私が思うに、これは柱3に少しかかってしまうのですが、教科の授業の中でもそうだけど、そうではないところでも、かなりいろいろな取組ができるのではないかと。この間、福井県に視察に行かせていただいて、そこで地域の魅力をみんなで考えてみようみたいなところでチームをつくって、子どもたちがそれを探して、聞き取り等をして調べて、まとめて発表するというような取組をされていました。そういう活動は非常にい

いなと思って、その活動を通じて探求的な学びということが体験できるというようなところで、まさに柱の1と3がつながってしまうんですけど、そういう教科以外のところでもそういう工夫というのをいろいろできるんじゃないかなという感想を持ちました。

○市長 ありがとうございます。

門原委員、お願いします。

○門原教育委員 安東校長先生がおっしゃったように、子どもが問いを持つということは本当に大事で、生成AIに対しても、自分が問いを持たなければ、何を聞いていいかわからないという記事を読んで、やはり問いがなければ答えも求めることができないということで、日常生活のなぜとか不思議だなという、小さいところから生まれる、そういう五感に対しての反応みたいなところを大事にしていくことがすごく大事で、教員が子どもとそういう考えに共感できるような姿勢を持ったりしていくこともすごく大事なかなと。寄り添って、そういうことを大事にすれば、先生も分からないわと、では、調べてみようかなみたいな、分かっているのですけれども、そういう仕掛けみたいなものはつくっていく必要があって、教育委員会が場の設定をするというふうにありますけれども、その場の設定によって、子どもたちが何か、自分たちも発表するのだったら、こんなことを発表したいなと逆算して行って、探求学習にうまく相乗効果があるように、これが福井県のやり方でしたね。初めから総合的な学習をやりましょうではなくて、発表会みたいなのが仕掛けられていて、そのために子どもたちが主体的に調べたり、やっていったことが結果探求につながっていきましてし、学力も、数値では測れなかったけれども、学力の向上にもつながっているであろうということは教育委員会の方もおっしゃっていましたので、そういうことは大事ななと思いました。

○市長 片山さん、お願いします。

○片山教育委員 私は、今の話を伺っていて、問いというのがすごく大事で、かつ私は情報収集というところで、自分で調べるということをじっくりしてほしいなと思います。うちの子なんかもそうなんですけど、今何か分からないことがあると、すぐネットを開いて情報を入れてしまうのですね。そうすると、自分から積極的にいろいろ探さなくても、情報はぱっと出てきちゃう。そうすると、すごく安易にというのか、もっと、さっき読書とおっしゃいましたけども、じっくり探すということをしてほしいなと思うのですが、自分が思ったこと以上のことがぱっと一瞬にしてデータとして出てきてしまうので、この資料の7にも本とか図書館と書いてくださっていますけれども、そういったところで、まず自分

で探す、情報を収集する、そこからみんなで持ち寄るみたいなのところも、場合によってはすごく丁寧にしていってもらえることが、今後自分で分からないことが出たときに、自分で探す、収集する、AIに頼るとかネットに頼るという、それを利用するというのも大事だと思うんですけど、やはり地道な作業というのも丁寧に、そういうものがない中で取り組んでみるというのも学校ならではの環境なのかなと思いました。

○市長 ありがとうございます。

私は、先日竜操中学に行きまして、どうして雲ができるのかというのを見たのですね。その授業。そうすると、太陽が出て、水が水蒸気になり、気圧の変化や温度で雲ができていく。それは、多分子どもたちもそれなりに理解をして、面白いとか、今の現象が分かったということだろうと思うのですが、多分私は、公立学校のいいところでもあるのだけれど、本当にいろいろな子がいるということだろうと思うのですね。それで、そういう子たちに対して、1つこういうプログラムを提供する。このプログラムの提供の仕方って、案外すごく難しいのではないかと。それをいろいろな理解力も違っている子たちに、どういふものを提供するのかということというのは、一人の先生ではできないのではないかと、それを聞いていて思ったんですけどね。それが先ほど森安さんの言われた、校内研修なのか、もっと前にベーシックなものを教育委員会で持っておくのか、よく分からないのですが、これと、先ほど資料6、7を教育長が説明されたものというのは、連動しているのではないのかなという気がします。どういうプログラムを子どもたちに提供するのが最大のプラスになっていくのかというようなことがあると思うので、本当に連動して議論していただきたいなという感じがします。教育長、何かありますか。

○教育長 市長がおっしゃるとおりで、総合的な学習が中心ですけど、各教科の中で探求的な学びはしないといけないと思います。それで、あと各学年で理解度が違う子どもたちが同じ学年でもいるんですけど、これは今後進める上で我々が一緒に頑張っていけないといけないのは、義務教育が小学校1年生から中3まで9年間の学びになっているので、小1でこれぐらい、中1でこれぐらいとか、どの学年も同じような提供の仕方じゃいけないと思うので、その段階を追った、最後の中3ではこういう姿が見たいというようなところは、校長会、学校とも教育委員会も議論しながら、ある程度のベーシックなものをつくるのが必要かなと思っています。発達段階に応じたいいものをつくっていけたらいいなと思っています。

○市長 3期をこれから始めていくとすれば、学力の点も、今までよかったことは継続し

ながら、それをどういうふうに新たなプラスを生み出していくのか、ぜひ議論していただければと思います。

次に、不登校の問題を教育長からお願いします。

○教育長 それでは、資料8をご覧ください。

2本目の柱、不登校の子どもへの切れ目ない支援についてになります。

これまで、第2期教育大綱で課題として残ったものとして、新規不登校児童・生徒の出現率の抑制、個別の支援計画の定期的な見直しが挙げられます。第2期教育大綱での課題を踏まえて、第3期教育大綱の取組の方針を、不登校の子どもの実態に合った適切な指導と切れ目ない支援を行うとしました。

第2期からの継続した取組としては、校内の別室を活用した校内支援教室や児童・生徒支援教室における支援、そして不登校を理由とした欠席10日以上で作成する、個別の支援計画を充実させていきたいと考えています。また、新たな取組としては、医療や心理の専門家を学校に派遣し、アセスメントに基づく個別の支援計画の見直しや、関係部局と連携して、不登校の子どものサポート体制を充実させていきたいと考えています。

資料9をご覧ください。

不登校の子どもと保護者を支える岡山市の取組をまとめたものに、支援機関を利用した子どもの人数を入れたものになります。

令和6年度の不登校の子どもは、1,648人です。その多くの子どもは、校内支援教室や児童・生徒支援教室等を利用していますが、支援が行き届いていない子どもが一定数います。そのため、教育委員会だけでなく、関係部局と連携して、子どもの実態に合った適切な指導と切れ目ない支援を行う必要があると考えています。

不登校の子どもの数の推移から見えた取組の効果と、今後の方針及び取組について説明させていただきました。ご協議をよろしくお願いいたします。

○市長 ありがとうございます。

これは、まず実態で小学校の校長会、中学校の校長会、それからあと門原さんが言われたように、関係部局とのこともおっしゃっていますので、田中さん、岡山っ子の立場からご発言をお願いできればと思います。

安東さん、よろしくお願いします。

○安東小学校長会長 失礼いたします。

実態もここで出ているとおりで、不登校の子どもはかなりの割合でいるというのは実態

としてはそのとおりです。それで、取組についても今教育長がお話ししてくださったとおりで、学校としても精いっぱいもちろんやっているのですが、子どもというのが学校だけでなく、いろいろなところで子どもは育っていくものかと思います。それは社会の中であったり家庭であったり、いろいろな場面で子どもというのは育っていくものなので、学校はもちろん精いっぱい頑張るのですが、学校だけでなくいろいろな専門家、いろいろな機関、いろいろな、例えば市民団体、いろいろな人の力を借りていくということが大事なのだらうなと思います。そういう意味において、今ここでご提案されているような関係部局間の連携だったりとか、それが今イメージされているものがどういったものかというのは、具体的にこの資料にはもちろんありませんが、もしかしたら岡山っ子育成局かもしれないし、保健福祉局かもしれないし、いろいろなところでどんどん連携がなされていくといいのだらうなと思います。多分、これまでも例えば生活保護・自立支援課とかが取り組まれているような活動であったりとか、こども福祉課が取り組まれている活動も、不登校そのものではなくて、家庭支援なのだと思うのですが、そういったような活動とかも関連が深いものもきっとあるのでしょう。それから、岡山っ子育成局がされているキャンプ事業みたいなものとか、そういったような不登校の子どもを受け入れながら、いろいろと社会体験をするような活動なども有益なものなのだらうと思います。社会教育施設がされているものも、もちろんそうです。そういった、いろいろなリソースを生かしていくということが、包括的に子どもを大切にしていくことにつながるのだらうなというのは、書かれているとおりだなと感じております。

○市長 昔は、不登校というといじめの関係がよく言われていたのですが、今いろいろな理由があると。小学校で主立った不登校の理由というのは、どういうふうに把握されますか。

○安東小学校長会長 理由が分からないものが非常に多いというのが、正直なところです。例えば、母子分離不安の子どももいます。学校に行ったら何か不安でなかなか入れない、そういうふうな母子分離不安の子どももとてもたくさんあるなと思います。それから、生活が不安定、昼夜逆転をしていて、例えば深夜までゲームをしていて朝も起きられないとか、そういうふうなタイプの子もいます。それから、学力が不振でという場合もあります。人間関係がという場合もあります。なので、非常に多様な理由があるので、これが不登校の理由だという、たった一つの答えがあるような状態でないというのが正直なところかなと思っています。

○市長 ありがとうございました。

では、森安さん、お願いします。

○森安中学校長代表 先ほども少しお話ししたのですが、不登校はやはり早期に発見、危ういなというときにどこにつないであげるかということで、学校のことを言わせていただきますと、非常にありがたいなと思っているのはスクールカウンセラーです。心理の専門家であって、そして学校の教員は今若手が多いのですが、不登校の子の保護者の方はすごく不安になるのです、初めの頃。それにうまいこと教員ではなくて、やはり心理の専門家のスクールカウンセラーさんが対応してくださるというのはありがたいのですが、申し上げにくいのですが、予算の関係から少し時間が少なくて、いっぱい詰まっているのです。うちだったら相談時間が大体3枠あるのですが、その1週間3枠は詰まっていて、カウンセラーさんにつなげてあげたいなと思っても、次の週ねとかという感じになってしまうところが残念なところでございます。

それから、今もちょっと言いましたが、長期になっている子に対しましては、本当に難しい。家庭訪問をしてくださっているソーシャルワーカーさん、これも専門のスクールソーシャルワーカーさんなんかもつけてもらえとうれしいなというふうにはすごく思っています。

それと、我々がやっていけないといけないなと思っているのは、当たり前のことではありますが、一時支援といいますか、温かい学校、温かい学級づくりというのをしっかりやって、例えば部活だけ来てもいいよというふうには言っているのですが、部活動だけでもいいよ、修学旅行だけでもいいよ、何でそこだけ来るのかというような子はなくしていかないといけないし、そういうような集団づくりをしっかりこれからも勉強して行って、帰りの会が終わったときには、あしたも学校来たいなという学校づくりをしていきたいなと思っています。

それから、今アセスというのをしてくださっていて、そのアンケート調査が年間3回あるのですが、この子は困っているよ、要支援だよというのが分かるのです。そのときに、集団づくりも教師サポートがいいクラスとか、友人サポートがいいとか、被信賴的關係がどうかとか、詳しく出るのですが、私は不勉強で、そういった研修もしてもらえると、集団づくりにいいかなと思います。

○市長 中学生というと、小学生と随分違って、成長の過程で人と人もかえって難しくなってくる。だから、温かいというか、楽しいクラスづくりといったって、そう簡単にいく

ものではないのではないかという気がして、それぞれみんな中学校を出ていますからね。だから、多分言うはやすく行は難しみたいなもの、だから今おっしゃっているようなものが本当にできるのかなというのが、私なんかは感じるところがあるので、そういうふうには持っていけないとならないという気持ちはおっしゃるとおりだと思うんですけどね。特段のコメントはなくていいですけど、そういう面で、小学校と中学校も、また不登校の理由は様々でしょうけど、大分違ってきているのではないかなというような感じはしますけどね、いろいろな話を聞いていても。

では、そういう面で子どもたちの学校外での力になっている岡山っ子のほうからコメントを。

○田中岡山っ子育成局次長 岡山っ子育成局次長の田中でございます。

岡山っ子育成局では、生まれてから困難を抱える39歳までの子ども、若者を支援する局ということで活動しております。

不登校と今まで言われまして、すぐ思い浮かぶのが、何か理由があって来ないのかなという一般的な思いを持っておりました。学校のほうのいじめであるとか、我が局の問題である貧困ですとかヤングケアラーとか虐待とか、そういった要因で来られない子が多いのかなという意識を持っていたのです。それで、先月ですかね、教育委員会さんのほうで、市長と若手の職員さんが一緒に話す機会に同席させていただきまして、その中で、理由というのが、そうではなくて、分からない人が多いのだという話を聞いて、少し衝撃を受けたところです。岡山っ子では、不登校のお子さんの中でも、家庭に問題があるお子さんとか、あと発達障害を持っていて、なかなかなじめないですとか、そういったお子さんを中心に相談を受けて支援をしていたところなのですが、実態はそれだけではないというのが分かったところです。それで、正直なところ、それ以外のお子さんというのが、岡山っ子でいまだどのような状況で、どんなことに困っていて、どんな支援が必要とされているのかというのをつかみかねている状況です。それで、今後、いろいろな理由があると思うのですけれども、実態のほうをまず把握させていただいて、必要な支援を教育委員会さんと一緒に考えさせていただければと思っております。

○市長 上西さん、またお願いします。

○上西教育委員 今回、大綱の案を見て、関係部局間の連携というのが出てきて、私はおっと思ったのですが、学校はもちろんいろいろ、資料9にもありますように、いろいろ頑張って、学校も教育委員会もやってこられていますが、比較できるか分からないんです



けれども、私は本業では高齢者・障害者の分野に結構関わっています。それで、高齢者・障害者の分野って、業界はもちろんですけど、福祉事務所があって、包括支援センターがあって、社協があって、民生委員がいて、いろいろなサロンがあったりして、警察、医療、専門職、いろいろなところがぱっと連携で絵で浮かぶのです。私がよくやっているからかもしれませんけど。でも、この不登校とかの問題って、私が知らないだけかも分からないけど、あまり絵が浮かばないのですよね。学校というのは分かるのだけど、正直学校以外あまり浮かばないというところが、これまで学校だけが抱え過ぎてきていたのかという部分はあるのかなと正直思っていて、その意味で少し視点を変えて、関係部局間の連携という形をぱっと打ち出されるのはいいことかなと。一遍洗ってみるといえるのか、もっと関与できるところがあるのではないか、例えばこども食堂とかは、社協とかが結構力を入れて増やそうとしていたりすると思うのですが、そういうこととか、先ほどのカウンセラーの話とか、確かに財源の問題があるのだと思うのですが、それは学校に来ているカウンセラーを考えるからであって、ほかにカウンセラーはいるわけですよ。どうしてそこにつながらないのかなとか、いろいろ工夫のしようは実はあるのではないかと考えています。そこらあたりを3期、これから検討していけたらいいのかなと思っています。

○市長 おっしゃるとおりですよ。高齢者のほうが絵が浮かぶ。

○上西教育委員 絵が浮かぶのですよ。

○市長 そこは間違いないのではないかなと。今、岡山っ子がいろいろとお話しいただきましたけど、一言で言えば悩んでいる、悩んでいるということは、まだあまり手がついていないということにもなってくるところがあって、そういう面では一つ一つ前に進めていけないといけないなと。3期は、いいこれのチャンスなのかもしれないですね。

門原さん、お願いします。

○門原教育委員 ご説明ありがとうございました。理由のところは、1つではなく複合的かもしれませんし、漠然とした、言葉にならないという子どももいるかもしれません。なので、おっしゃったように、実態をよく分析していただいて、どういうパターンのお子さんがいて、そういうパターンの方にはどのような支援をする関係団体があって、どこにつなげばいいかということ整理していただいて、それが学校側にもあって、実は子どもや保護者もそういうことを知っておくと、自分はここだったらここに行けばいいのかなという、それがまさに生きる力ではないですけど、情報があって、自分でも動いてみようとか、中にはそういう力のあるお子さんもいらっしゃるの、そういうことができてくる

と、とてもよいのかなと思うので、この3期の中ではそういうことをして、みんなで力を合わせてやっていけたらいいかなと思っています。

○市長 では、片山さん、お願いします。

○片山教育委員 私も同感なのですが、あともう一点、どこともつながれない、つまり誰かと会うということに対してものすごく抵抗感があるお子さんに対して、これだけ今1人1台端末であるので、まずはもっと敷居を低くして、オンライン上で会えるとか、それがメタバースがいいかという、私はどうかなと思う部分もあるのですが、例えば画面越しに友達をまず見られるとか、そこから自分もそこに入れるとか、何かそういう家庭にいても外とつながれるツールというところから、ちょっとずつ現実の対面につながっていくということも少し検討していただけたらありがたいなというふうに思います。

○市長 ありがとうございます。

教育委員会の中で、こういう不登校対策をずっとやられている方で、今上西さんがおっしゃったように、なかなか絵が頭の中で描きにくいと。事実上こんなことをやっているのだけど、こんな問題があるのだとか、何かそういう話が実態論として言えることがあればと思いますが、誰かいらっしゃいますか。

○千田多様な学び支援担当課長 多様な学び支援担当課長の千田です。

先ほどのお話を聞きまして、絵が浮かばないというところで、今年度教育委員会の中で、その不登校に関する支援の全体図というのを作成いたしました。それで、実際に資料9のところでは略図を載せさせていただいているのですが、もう一枚詳しい内容のものを作成しております。それで、お話の中で、学校が全部抱えているのではないかという話もあったのですが、実際本当に学校のほうにはよくしてもらっております。それ以外のところにおいて、児童・生徒支援教室であったり、岡山市の教育相談室のほうでしっかり関わってもらっており、さらには学校のほうになかなか登校できない子には、訪問相談という形で相談員も派遣しております。ただ、実際訪問相談員の案件にしても、なかなか要望が少ない状況にありまして、そういうところでは教育委員会としても苦しいなと思っている状況です。

○市長 では、教育長、お願いします。

○教育長 この資料9の図に、市長がおっしゃるとおりで、もう少しこの輪が広がるようなイメージができるといいなと思っておりますので、第3期の取組としてはこの拡充が大事だと思います。

もう一点、森安校長が言われた、私も学校現場の校長をしております、不登校、行き渋りが始まったときの保護者の対応は非常に悩まれています。無理やり学校に連れていけばいいのか、子どもが言うとおりに休ませればいいのか。これは、子どもの支援しか資料9には書いていませんけど、併せて保護者支援も何とか研究、検討、取組があってもいいのかなと。答えはないのですが、どういう理想かというところで。それで、他都市の例を見ると、一般市民を巻き込んで、不登校は悪ではないというパンフレットなんかを作っている市もあるので、市民の方の目が気になって親が学校へ行かすということもあるので、そのあたりも一緒に研究できたらいいなと思っております。

○市長 他都市の話が今出ましたが、この不登校の話というのは、全国。海外はどのようなのですか。あまり不登校って聞かないですね。

○教育長 聞かないですね。

○斎藤教育次長 教育次長です。

前に1回講演でお聞きした話ですけれども、世界的に不登校と呼ばれる整理があるのは日本と韓国と言われているそうです。なぜかという、学び場所が学校というふうに基本法で定められているために、学校での学びが日本、欧米では家で学んでも教会で学んでもスクールで学んでも、それは全て学びというために、どうしても整理をつけなきゃいけないので、世界的にそういう分析をされていないというのは聞いたことがございます。

○市長 そもそも、欧米では不登校という定義そのものがないと。それも1つなのかもしれないですね。だから、この前打合せをしていたら、不登校の生徒が、学校に行く意味が分からないというので学校に行かないと。それに対して、どう答えるかというのは、一般的には答えられるけれども、その子の心に届くかどうかというのはよく分からないですね。

うちは先生方がよくやっていただいて、不登校の出現率がそれほど高くないというものあるわけで、逆に他の政令市なんていうのは相当悩んでいるんだろうと。連絡は取り合っていると思いますけれど、考え方を我々も大幅に変えていかないとならないのかもしれないという気がいたしますよね。今、海外の話初めて聞きましたが、不登校という定義がなければ、不登校は問題になりませんよね、確かに。

では、でもこれは3期の大きな課題としてやらせていただくということであります。

次は、3番目の岡山市への愛着と誇りの醸成。

○教育長 それでは、資料10をご覧ください。

3本目の柱、岡山市への愛着と誇りの醸成についてです。

現在、多くの学校で中学校区を中心として、史跡などについて話を聞いたり調べたりする地域学習に力を入れて取り組んでいます。先日、先ほどもありましたが、市長と若手教員の懇談会を開催しました。その中でも、地元の方との交流等を通じて変わっていく子どもの姿を見ると、地域学習の価値を感じるという発言があった一方で、地域が学区から大きくなっていくにつれて、地域が好き、地域の役に立ちたいという気持ちが薄くなっていく気がするという発言もございました。

岡山市は、古墳、城跡など、数多くの歴史文化遺産を有し、国指定史跡は指定都市で京都市に次いで2番目に多いという強みを考えると、各学校で行われている地域学習の範囲を広げ、岡山市全体の歴史や文化をもっと知る機会があってもよいのではないかと考えています。

そうした機会を通して、子どもがその歴史の偉大さや、そこに関わった人々の思いに共感したり感動したりすることで、子どもの愛着や誇りの対象が岡山市全体へと広がっていき、子どもの自己実現や社会的自立、社会貢献へとつながるエネルギーになるのではないかと考えています。

そのための取組の一つとして、教育委員会としては、市共通で学ぶことができる歴史に関する資料を作成し、学校に提供しようと思っています。内容については今後の検討となりますが、現場の先生方とも十分協議して決めていきたいと考えています。

2本目として、子どもが専門家等の説明を直接聞く機会を設定しやすくなるよう、講師派遣の支援をすることです。

3本目としては、探求で話題になりましたが、地域学習の成果を発表する場をつくることで、子どもの意欲の高まりや好事例の共有につなげてまいりたいと考えています。

説明は以上です。ご協議をお願いします。

○市長 ありがとうございました。

また、同じ順番で。

○安東小学校長会長 失礼いたします。

ここではまず歴史が書かれているので、まず歴史から話をしたいと思います。

岡山市全体として、どういう歴史を大事にしていくかという、まず柱を置く必要があるんだろうなと。どういうところに到達点、例えば中3なら中3の段階でどういう到達点に行ったらいいのかというものが要るのだと思います。そこから逆算して、中2なら、中1

なら、小6なら、小1ならというふうに、その前提になる学習が何かを追っていく、そういうストーリーが要るんだろうなと思います。だから、歴史なら歴史の到達点を決めることをまず協議し、それに併せて小学生だったら、例えば地域の歴史に関心を持つとか、あるいは昔の話を聞くとか、というようなところが準備性、レディネス、子どもにとっての準備性になるのだろうなと思います。だから、そういうふうにちゃんと追っていけば、市全体として到達点として中3を想定したときに、市としてこういうふうな愛着を持ってほしい物語が描けるようになるのだろうなと私もそこは思いました。

それから、今まず歴史で描いてくださっているのですが、これが大綱の7年間の間で、歴史だけでなく少しずつカテゴリーも増えていったらなと。例えば、スポーツならスポーツとか、例えば岡山の誇れるスポーツを最後感じて中3で終わるとか、それから例えば文化、こういう文学とか文芸があるとかといったような、中3のこの時点でこういう認識を持って終わるとかというふうに、そういうカテゴリーを増やして行って、岡山市の魅力というものの幅も広げていくような展開を中期的には考えていったらいいのではないかなと思います。

というふうに、まず1つは到達点を決める、ストーリーを描く、それでそういうカテゴリー自体を増やしていくということを展開していくと、きっと岡山のことが好きになる子どもたちが絶対増えてくるだろうなと思いました。

それから、もう一点なのですが、それを考えていくときに、それこそ教員だけで考えるのはよくないと思っています。教員の知識、教員の物の見方から見てというふうになりがちなので、こここそいろいろな方、それこそ市のいろいろな専門家の、行政の専門家とかもいらっしゃるだろう、いろいろ市民団体の方もあるだろう、それぞれの専門家の方から聞いて、例えばスポーツならスポーツで、こういうふうな出口を求めたいよねとか、文学なら文学で、こういうふうな出口に行ったらいいよねとかという、そういう議論がそれぞれのジャンル、専門家も含めてできていくと、教員もある意味狭い物の見方だけではない、より広い物の見方でもってストーリーと終点が描けるのではないかな。それこそが市民協働のまちづくりなのではないかなと思ったりします。

以上です。

○市長 ありがとうございました。

森安さん、お願いします。

○森安中学校長代表 安東先生に倣って、歴史の話からします。

私は非常に狭い見方かもしれません。まず、この市共通の資料の作成・提供については、今教育委員会の全校共通フォルダーに「青梅シリーズ学区巡り」というのを私が昨年入れました。これは何かといいますと、「青梅」というのは、中学校教育研究会社会科部会が毎年発行している冊子なのですが、平成元年から30年まで、シリーズ学区巡りといって、各学校の史跡などを調べて書いたシリーズが何ページかあったのですが、それはもったいないなと思って、それを紹介しておりますので、もし参考になればと思っております。これが1つです。

それから、2つ目にスポーツのことを言われました。講師・団体の派遣について、実は今年、去年パリオリンピックに出た中西絢哉さんという方を、岡北中学校出身なので、呼びました。それで、講演をしてもらったのですが、実演がスポーツの選手はできるので、子どもはそこがすごい頭に残るし、感動もするのです。中西選手は、普通の公民館とかホールとかだったら、1メートルとか3メートルで弓を射てください、でないと外れたら困るからというけど、岡北中学校なので、私が責任を持って室内競技18メートル先に的をつくってやってもらったのです。そしたら、もちろん3つとも的中するわけで、それはやっぱり、わあ、すごいな、この人という感じがしたり、それからその後講演の後に質問などしてもらって交流してもらったのですが、そういうのは一生残るのではないかなと思っているので、そういうのがいいかなというふうに思っています。

それと、大きな地域社会での学びということで、これも本校だけのことなのですが、北公民館というのがすぐ近くにありまして、これが非常によくやっていて、今週の土日も北公民館まつりにうちの子がボランティアで20名ほど行って、祭りの司会をしたり、喫茶の手伝いをしたり、カレーうどんを作ったり、いろいろするのです。それから、その前にみのサマーフェスタというのもあって、これは30人、40人ぐらいボランティアで行っていました。それから、ふだんでも自習室を開放してくださっていて、これは延べ500名以上、去年自習室を使ったようです。その前の年は120名ほどだったのですが、どんどん口コミで広がっていったり、いいなと思ってやっていたり、地域に愛するとか、いいなと思ってもらう、公民館の敷居を低くする、そういう点でよかったのではないかなと思っております。

うちの学校の話ばかりになりましたが、参考になればと思っております。

○市長　ありがとうございました。

では、上西さん、お願いします。

○上西教育委員 私は、先ほども言いましたが、社会の中で生きるのだということを学校でこそ教えられるかなと。家での1人での勉強よりも、小さな社会であるクラスメートとか先生とか、そういうところの人間関係を通じながら、ちょっとずつ社会の中で生きていくことを学んでほしいなと思っています。その意味では、社会で生きて、社会で支えられて、支えていく人間になっていくのだと。つながりですね。歴史とかを見れば、過去とのつながりで自分があるし、それが未来につながるしということもあるので、そういうつながりを少しでも意識させられるというのが、この柱3には意味があるのかなと私は思っています。

あと一点、先ほども言った、福井県に行ったときに、福井県ではふるさと教育の土台にポジティブ教育というのを置いていました。まず、自分の魅力を考えましょう。それで、周りの魅力を考えましょう。それで、地域の魅力を考えましょう。それで、最後は県まで行くのですが、そういう魅力を考えるというところを1つ土台にして、ポジティブということからつなげていって、ふるさと教育につなげていったというのは非常にいいなと思って、ここらあたりも少し参考にさせていただいたらいいかなと思いました。

○市長 ありがとうございます。

では、門原さん、お願いします。

○門原教育委員 なかなか難しいなと思いながら、愛着というものが福井県でも10年間ぐらいかかってやっと見えるようになったというもので、本当に目には見えないもの、これがまさに見えない学力という、学力の話をしましたけれども、前回のときも。だから、そういうものを育てていくということは、すぐにはできないのですけれども、でもどこかで始めないとできなくて、今回は歴史文化のあたりを切り口にしてやるということなので、市の共通資料の作成も、これもどこの学年をターゲットにして、どういうふうにしていくかというのは、かなり分析をしないとできなくて、ここらあたりはとても大事なところで、手間のかかることかなと思いますから、このあたりをどういうふうにしていくかということと、これは先生方にはできないので、やはり教育委員会のほうが中心になってつくっていけるのだと思うのですが、そのときには教育委員会の人全部地域を知っているわけではないので、いろいろな人のお力を借りて、まさに教育委員会が協働をさせていただいて、子どもに、その発達段階でこういうものだったら理解できるだろうなと、こういうものだったら、自分も地域のことを知って楽しかったとかやってみたいとか、そういうものが、ロードマップとか、それから発達段階の表みたいなものとか、安東校長先生がお

っしかったですけど、そういう目指す子ども像とか、何かそういうものをつくっておかないと、始めたけど、誰がターゲットだったのかとか、どこまで行き着けばよかったのかとか、その辺が曖昧になりかねないので、特に愛着とかというのは目に見えないので、さっきおっしゃった到達点とか目指す子どもの姿とか、そのためにはこういうものを使うというような、何か一覧表みたいなものができていくといいのかなと思いますけど、大変な仕事かもしれないですけど、ぜひ取り組んでいただきたいと思います。

○市長 ありがとうございます。

○片山教育委員 ありがとうございます。私も福井県に行かせていただいたときに、まずすごくエネルギーの要る作業だと思うのですけれども、全部の学校さんに一斉にそれをしてくださいという形ではなくて、できるところから手をつけていかれるというところで、それこそ地域性によってはすごくいろいろなことを取り上げやすい地域もあれば、なかなか発掘するという作業の要るところもあって、そのやりやすいところから始めていくというところもすごく勉強になりました。

あと一点、うちの子どもたちもそうで、今中学生はコロナが終わって、また職場体験が始まって、あの3日間は物すごく貴重な体験をして帰ってくるのです。それで、大学でも面接をしていると、結構中学校の頃の職場体験というのがすごく印象に残っていて、保育の仕事がしたいとか、教育に、学校に職場体験に行って、やはり学校の先生になるのがいいと思った、そういうアクティブラーニング的な、自分がやってみるということを経験させてもらうことで、自分が地域の中で何ができるかみたいなことも見つけることができるというか、関わってやってみる、そういう職場体験、今あるそういう制度ももう一度見直してもらいながら、よりよい愛着とか誇りの醸成というところにつなげていただけるとありがたいなと思います。

○市長 ありがとうございました。

全体を通して見ると、この愛着とか誇りの醸成は重要だけど、案外難しいぞと。それで、安東さんも中3から小1まで、大分違ってくるので、どういうふうにやっていくのか。また、門原さんからは、どこの学年をターゲットにするのかみたいな話もあり、教育委員会がこれは大分リーダーシップを発揮しないとできないと思うのですが、担当されることになる方はどなたなのですかね。どう考えているのか。誰が考えるか。動かそうとしているのか。今の考えを教えてくださいなと思います。

○佐藤教育企画総務課企画調整担当課長 教育企画総務課の佐藤です。



覚悟を持って、協力しながらやってまいりたいというふうに考えております。教育委員会の力だけでは、事務局の力だけでは難しいところも当然あるかなと。私も福井の視察に同行させていただいたのですが、市を挙げて取り組んでいらっしゃる様子が説明の中から伝わってまいりました。ですので、いろいろなところに教えを請うて、そして言われたロードマップのようなものも、もしかしたらみんなで協力しながらつくっていったらいなという思いはございます。頑張ります。

○市長 どちらかというと精神論でありましたけれども。

教育長、何かありますか。

○教育長 皆さんおっしゃるとおりで、この3本目の柱は、楽しみでもあり、難しいと思います。ただ、私の立場としては、今まで総合教育会議にずっと出させていただきましたけど、学校教育だけの議論になっていたのです。それで、この3本目の柱は、先ほどみんなが話しているように、文化財課、そして生涯学習課の公民館活動、こういったところもチームとして入ってきておりますので、私の立場としたら、教育委員会がチーム感を持って、チーム全体で学校と協力しながら、公民館とも協力しながら、広がっていけるかなという楽しみはあるので、精神論ですけど、頑張ります。

○市長 私も、では、まずは精神論から言うと、私の尊敬する読売新聞の橋本五郎さんという方がいる、ご存じですか。彼が言っている言葉に、こういう言葉があります。まずは、家族を愛しなさいと。家族を愛せない人間は、地域は愛せませんと。それで、地域を愛しなさいと。地域を愛せない人間は国を愛せませんという言葉があって、私もそのとおりなのではないかなというように思いました。それで、先ほども少し話が出ましたけれども、若手教員との話の中で、ある具体的な生徒の反応を教えてくれた方がいらっしゃいます、それは最初教育長が要約して伝えられていましたけれども、子どもたちに質問したというのですよ。まず第一に、例えば小学校なら小学校区の中での歴史を聞いたところ、知っている人と言うと、相当数が手を挙げる。もう少し広いエリアになって、例えば中学校区になると、少し減ってくる。岡山市全体の話になると、ぐんと減ってしまう。地域というのは一体どこで区切るのがいいのかと、これもいろいろあると思いますね。これもいろいろあると思いますが、上西さんのおっしゃった、社会で生きる、社会って一体何なのだろうというところがあって、一つの行政主体が、区域が本当の社会なのかということもありますし、そこの議論も重要だと思うのですが、ただあまり狭いエリアだけを地域と見ていると、少しおかしくなってしまうという要素があることは間違いないと。

それと、私は安東さんの言う話でいくと、中3の子たちに感動を覚えたことがあるのです。実は、皆さんご存じですかね、今岡山市の東区の瀬戸町万富に東大寺の瓦窯跡というのがありまして、それが11世紀の後半に平重盛というのが東大寺を焼き討ちします。焼き討ちして、当然全部焼けてしまうのですが、その頃というのは仏教界のシンボリックなところ、仏教がおかしくなってしまうと、自分の生活も駄目になるのではないかというふうにみんなが思って、すぐに再建したのです。その再建した人間が重源という人で、その次に一緒になってやっていて、重源が亡くなった後にやったのが栄西という、これは岡山の出身の人。それで、重源、栄西が何をしたかという、東大寺の瓦を全て瀬戸の万富でやったのです。それを、私が少し瀬戸に行って、そういう説明をして、あそこというのは吉備の5族といいまして、上道という一番東側の族で、そこは農業にあまり適さなくて、テクノクラート（専門技術集団）がいる。だから、焼く技術とか、もちろん土もあるし鉄もある。ということで、そういったものが発達していった、ここは東大寺が再建するになくてはならない場所だったのだという話をしたのですけど。その子どもたちが、今度ちょうど t e n j i n 9 という R S K の本社のところで講演をして、それに関連した様々な資料を持ってきて、それを映しながら説明していく。備前焼にこれになっていく、ないしは備前の長船の刀になっていく、そういった経緯を説明していました。本当にすごいなと思ったのですけど。彼女たちは、多分一生忘れないのではないかなと。こういったものをそれぞれの子どもが勉強してやっていけば、私は誇りに思うことというのは結構あるのではないかと。

先日、有森裕子さん、それこそ岡北中学の出身の有森さんなんかも、私は本当の岡山の誇りになっていく、これは陸上競技、オリンピックでもありますけど、カンボジアの子どもを助けていく、こういったスポーツというか、人に着目していけば、いろいろな人間がいて、そうなのだと私は思っていくのではないかなと。

ただ、思いはみんな違うので、ターゲットをどうするの、一体何をどういうふうに教えていくというのは、すごく難しいと思います。これは、今精神論で教育長と佐藤さんが前向きな答弁をされましたので、これからもうまくいくのだらうなと思っているところでもあります。

そろそろ時間になりました。

今回、3本柱を整理させていただいて、今までも随分議論させてもらったので、大分修練という形になったと思いますが、新たな気づきが今日の議論の中でもあったと思いま

す。それらを踏まえて、最終的には骨子案、次回の総合教育会議において骨子案について議論できればということを考えております。次回もよろしくお願い申し上げます。

それでは、本日の協議はこれまでとし、事務局に進行を戻します。

○司会 ありがとうございます。

次回の会議につきましては、改めて通知させていただきます。

以上で令和7年度第3回総合教育会議を閉会します。

本日はどうもお疲れさまでした。

○市長 どうもありがとうございました。

午後4時57分 閉会